

## 歌と写真で綴る薩摩の脇道

## — 歌三昧の史跡巡礼, その6 - 1 —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 粟 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章  
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 粟 隆志

薩摩、鹿児島と言えば、まず思い浮かべるのは、西郷どんと桜島である。

私が大分県から鹿児島に来た理由の1つに、高校生時代に西郷の漢詩に親しんでいた事がある。

子供の名は、隆盛に因んで付けた。

西郷は、郷土を代表する大人物で、江戸末期から明治初期の日本の立役者である。

この時代は、幕末から明治維新という、日本の激動・激変の時代である。

本章では、鹿児島市内に点在する西郷の史跡を巡りたい。従って、今までの市内地域毎の各章の記載と、重複する事もある。

また、その時代背景は、西郷の行動動機に重要な影響を与えているので、それに関して比較的詳しく述べる事とする。

大国・強国のエゴイズムは、いつの時代であろうと常に存在し、国家・個人に対する脅威となる。現在の日本も例外ではない。

西郷の時代は、日本史に於て、正に代表的な外国の脅威に晒された時代であった。

## [第十二章:西郷隆盛と彼の生きた時代]

## 〔1〕大西郷を讃えて 一編の詩に三句を添えて

陸軍大将・西郷隆盛、陸軍小将・桐野利秋、同・篠原国幹が連名で、県令・大山綱良に「政府へ尋問の筋これあり」と届け出たのは、1877（明治10）年2月の事である。

第1番大隊の指揮長は篠原国幹、以下、第2番・村田新八、第3番・永山弥一郎、第4番・桐野利秋、それに別府晋介率る始良郡の各郷の子弟より成る先鋒隊、2個大隊は、2月15日より順次、桜島の雪景色を

後に東京をめざし、鹿児島を出発した（図196）。

これに対し、2月19日、太政大臣・三条實美は天皇の判断を仰ぎ、西郷軍への征討令を通達した。



【図196】南洲墓地から望む桜島(令和4年12月)

明治10年2月、西郷軍は雪の桜島を右手に見ながら、加治木経由で東京を目指した。

7ヶ月後の同年9月24日午前、岩崎谷にて敵弾を受けた西郷は、別府晋介の介錯により、49年8ヶ月の人生を終えた（図197、198）。



【図197】陸軍大将の軍服姿の西郷隆盛像

西南戦争の最終決戦地、白山を背景に、桜島に向かう西郷隆盛。



【図198】西郷の眠る南洲墓地

313 大西郷を讃えて (1)  
『月に叢雲 花に風 四十九歳 無念の秋』  
宗博

明治十年九月の朝<sup>あした</sup> 降る雨寒し<sup>ときり</sup> 時利無し  
岩崎谷に巨星落つ  
なべて此の世は儚くて  
終<sup>つひ</sup>の棲家にあらざりき  
城山の 草葉に置ける白露や  
水に宿る月よりあやし  
さやかには 煌めけれども<sup>きら</sup> たちまちに  
昇る朝日<sup>あす</sup> 微かな風にも誘はるる

人間<sup>じんかん</sup>五十年<sup>けてん</sup> 化天のうをを比ぶれば  
夢幻<sup>ゆめまぼろし</sup>の如くなり  
一度<sup>ひとたび</sup>この世に生を享け  
滅せぬもののあるべきかは  
喩へあり 月にむら雲 花に風  
川は流れて 止まらず<sup>とど</sup>  
季節巡れど 留まらず<sup>とど</sup>  
げに虚しきは 憂き世かな  
時のまにまに 流れ去る  
(改・敦盛)

314 戦ひの 涙の名残り 草の露

315 陽は昇り 空しく消ゆる 草の露

316 凡誘ふ 草の露かな 秋の風

〔2〕幕末から明治維新の重要な歴史的背景

(1) 封建制度

中国、殷の時代の統治制度は、明らかではないが、次の周時代（紀元前 11 世紀頃～紀元前 256 年）には、封建制度が<sup>すで</sup>に確立していたと言われる。

それは、周王が重臣を諸侯に任命し、一定の土地と人民に対する支配権を付与する統治形態である。

ヨーロッパでも封建制度はあったが、その形態は若干異なる。

日本では、通常、鎌倉時代から江戸時代末の武士による支配時代を封建時代と呼ぶ。江戸時代は近世（後期）封建時代である。

鎌倉時代の武士に於る主従関係は、将軍と御家人間での土地（人民を含む）領有統治権と、それに呼応する軍事奉仕などの、臣従義務により成立していた。

いわゆる「御恩と奉公」である。

土地の重要性は「一所懸命」という言葉に端的に示されるように、その本領安堵こそが生活の生命線であった。

多くの文学や人形浄瑠璃、義太夫などで広く知られる「鉢木<sup>はちのき</sup>」は、一族の横領で領地を失った佐野源左衛門常世と旅の僧・北条時頼の逸話で、「いざ鎌倉」という言葉と共に、当時の主従関係をよく物語っている。

なぜか私の時代の小（中？）学校の国語の教科書にもあり、明確に覚えている。

然し、この政治・経済形態は、元寇を境に変化していく。多大な犠牲に対する恩賞を御家人が得る事ができなかったからである。

後醍醐天皇による、短期間の建武の中興（復古政治）を除き、その形態は変化しても、主従関係の上に存在した武士が、江戸時代末まで、支配階級である事に変わりはなかった。

さて土地を基本に成立する封建制度下に於て、種々の特権を有する武士階級の最重要課題は、経済活動の要、基盤となる食料（米）の生産に従事し、年貢という名目の納税の義務を負わされた農民との、明確な差



別化である。

豊臣秀吉により施行された検地、刀刈りによる兵農分離が、支配者と被支配者の差別化、序列を決定的なものとした。平たくいえば、身分制度、階級制度の確立である。

これは、徳川幕府により完成される。

この身分関係に、職人や商人（合わせて町人）も取り込まれる事となる。

平和が持続した江戸時代には、これらの職業を世襲化する事により、身分制度は、一層堅固なものとなっていたが、一方、二百数十年に亘る時代の経過は、貨幣経済の発展に従い、職業の多様化、産業構造、流通機構などの変化を、つまり社会・経済構造の変化をもたらしたものの、基本的には身分制度自体に大きい変化は生じなかった。

明治維新の天皇中心の中央集権国家の、最も重要な体制改革は、諸侯（藩主）による土地所有の撤廃、身分制度廃止（四民平等）による、土地を基盤とした封建制度の終焉であった。

## (2) 江戸時代の儒教、朱子学、陽明学

封建制度は通常、世襲性により、安定政権をめざす。幕府の、その拠って立つ思想は、性善性に立脚した儒教である。

徳による「五常（仁・義・礼・智・信）」と「五倫（父子・君臣・夫婦・長幼・朋有）」の道を重視する思想は、理に適い、支配者に都合がよく、国政の安定に寄与した。

江戸時代には、儒教より派生した、秩序・体制志向の朱子学が重用された（林羅山など）。

理想主義的な朱子学の徳目が形骸化したと、その限界を認識し、且つ、時代の動向に即応した実践理論を重視し、儒教より派生した陽明学も一部に広まった。

第3代将軍家光の時代には、関ヶ原の戦いや大阪の陣以後、大名の減封、改易などにより、浪人があふれていたが、家光の死後、将軍継承者の家綱がわずか11歳であったことから、1651（慶安4）年、陽明学者・軍学者の由井正雪による幕府転覆事件（由井正雪

の乱）が起った事は、特筆される。

陽明学は、幕末から明治維新の原動力の一つとして、影響を与えたとも言われる（吉田松陰、高杉晋作、佐久間象山、西郷隆盛など）。

## (3) 帝国主義と植民地政策

スペイン、ポルトガルによる「重商主義 mercantilism」に始まる植民地政策は、欧米各国を巻き込み、豊富な原料供給地と巨大市場の獲得に成功。

それは、18世紀～19世紀のイギリス産業革命を生み出し、更なる膨張主義、植民地拡大に拍車をかけた。

イギリスは資本の蓄積、米独立戦争の戦費調達などのため、植民地インドで製造したアヘン（ベンガル阿片）を清に輸出し、莫大な清の銀を獲得した。

アヘンの弊害は周知の通りであり、清朝はアヘン禁止策を決定。

林則徐をアヘン密輸の取り締りに当らせたが、イギリスの巧妙、強引、執拗さに林は結局、失敗・失脚した。

1840（天保11）年に、清とイギリス（英夷）との間に、アヘン戦争が始まった。

然し、イギリスの近代兵器の前に、清はなす術もなく敗戦した。

1842（天保13）年の南京条約では、自由貿易制、5つの自由貿易港、英への賠償金、香港島の割譲が締結された。

更に翌年には、治外法権、関税自主権の放棄、最恵国待遇条項など、不平等条約が締結された。

なお、香港主権移譲が施行されたのは、1997（平成9）年になってからである。

このアジアの大国・清が敗北し、屈辱的な領土割譲や、不平等条約が締結された事は、日本にも直ちに伝えられた。

国の領土や国家の主権が侵害されるというこの戦争の結末は、欧米の脅威を象徴するもので、目と鼻の先で起ったという事もあり、幕府を驚愕、震撼させた。

老中・阿部正弘は、欧米との戦争は得策ではないと考えるに至った。

戦争を避けようとする弱腰外交は、幕府の対外軟化につながり、1842（天保13）年には、遭難船に限定してはいるが、開国の第一歩となる「（天保の）薪水給与令」が出された（以前にごく短期間ではあるが、同様の法令が出されている）。

大きく状況が動くのは、1853（嘉永6）年のペリー率る、アメリカ東インド艦隊、いわゆる黒船の来航である。

西郷が動き出すのは、まさにこのような欧米の脅威が表面化した時代である。

日本史は激動の時代を迎えようとしていた。

#### （4）中華思想、尊王（皇）攘夷

中華思想は、中国が世界の、そして文化の中心（華）であり、中華の徳により、周辺の異民族を包摂しようという思想で、特に天子による支配理論、儒教による王道政治理論として、戦国、秦、漢時代にかけて形成された。

日本にも大きな影響を与えた事は、既に述べた。

中華からみて東西南北の異民族は各々、東夷（例：倭の奴国王の記載のある「後漢書東夷伝」、西戎<sup>せいじゆ</sup>、南蛮<sup>なんばん</sup>、北狄<sup>ほくてき</sup>と呼ばれ、朝貢すべき存在であった。

この思想は、清時代、帝国主義時代のアヘン戦争の敗北により、大きく揺らぐ事となる。この時、清は、イギリスを英夷と呼んでいた。

尊王（皇）攘夷思想は、国家存立の根拠としての尊王思想と、欧米列強つまり彼ら外敵を打ち払うという、攘夷思想が結合したものである。

ちなみに「王」「皇」は天皇の事で、尊王と勤王は、ほぼ同義語。攘夷は中華思想からの「夷」と、追い払うという意味の「攘」から成る造語で、欧米列強（露も含む）を打ち払い、天皇中心の国家をつくらうというものである。

「尊王攘夷」は、徳川光圀の「大日本史」編纂以来の、水戸学の伝統である儒教思想に立脚し、本居宣長の国学史観の影響を受けた、水戸藩の藤田東湖の造語で、水戸藩第9代藩主・徳川斉昭の設立した、藩校・弘道館の教育理念となり、更には、明治維新の最大の原動力となった。

西郷隆盛は、藤田東湖に親しく教えを請い、学んでいる。

第15代将軍・徳川慶喜が、最終的に天皇に恭順の意を表し、大政を奉還した事の根底には、水戸学の教えが、身に染み込んでいた事も一因と考えられる（私見）。

後述するが、将軍・慶喜は、水戸藩主・斉昭の実子である。

#### （5）島津と諸藩、公卿、将軍家、およびおゆら騒動の対人関係

まず最低限の基本知識としての、徳川家と島津家の歴代（江戸時代後半）について述べる。

なお、徳川将軍家（宗家）の継承に関しては、将軍家そして御三家（尾張、水戸・紀井＝紀州の徳川家）が、更にその後、御三卿（田安、一橋、清水の徳川家）が加わり、将軍家に後嗣<sup>こうし</sup>がない時に、これら6家から将軍が選ばれる事となった。将軍家の断絶を防ぐ為であったが、争いの原因ともなった。

徳川家康は、もと三河国（現・愛知県）の松平家の出身で、戦国時代末に当主・松平家康は、徳川家康に改姓。その一族他が、江戸時代に松平姓を名乗る。

##### ●徳川歴代将軍

- 11：家斉（一橋） 12：家慶<sup>いえよし</sup>
- 13：家定<sup>よしのぶ</sup> 14：家茂（紀井）<sup>いえもち</sup>
- 15：慶喜（一橋）

##### ●島津家の江戸時代の歴代藩主

- 8：重豪<sup>しげひで</sup>
- 9：斉宣<sup>なりのお</sup>（重豪の長男、実権は重豪）
- 10：斉興<sup>なりおき</sup>（斉宣の長男）
- 11：斉彬<sup>なりあきら</sup>（斉興の長男）
- 12：忠義（久光の長男）

（図199、200、201、202、203）





【図199】島津重豪公頌徳碑  
鶴丸城趾内の御楼門の隣にある碑。垣の向こうは堀。



【図200】城山を背景に桜島に向う島津斉彬公像



【図201】城山を背景に島津斉彬公を祀る照国神社



【図202】城山を背景に桜島に向う島津久光公像



【図203】城山を背景に桜島に向う島津忠義公像  
軍服姿、帽子の下はちょん髷。背後の城山は急峻で、天然の要害。

忠義は最後の藩主で、斉興の側室・お由羅の子である久光の長男。斉彬と久光は異母兄弟。忠義の時代に久光は国父として実権を握る。

・薩摩藩第8代藩主・島津重豪

重豪の正室は、御三卿の一橋家初代当主・徳川宗尹の娘である。

・重豪の娘・篤姫（寧姫，於姫，茂姫）

後に第11代将軍となる徳川家斉は、一橋家に生まれた（当時は豊千代）。篤姫は、3歳で豊千代と婚約し、一橋邸で豊千代と共に育てられた。

家斉の将軍就任直前に、近衛経熙の養女となり（寔子，後に広大院），家斉に嫁し、御台所（将軍の正室）となる。家斉は53人（男26，女27）の子をもうけた。

重豪は、将軍の岳父となる。

・薩摩藩第10代藩主・島津斉興

斉彬の父・斉興は、将軍家斉より一字を賜り、1809（文化6）年、第10代藩主となる。

調所広郷を重用し、藩政改革で、（密貿易などにより）財政回復に成功。

1849（嘉永1）年、幕府の阿部正弘による薩摩の密貿易の調べで、藩主・斉興に疑惑が及ばぬよう、自殺したといわれる。

このような状況は、政治家の社会では、現在もつづいている。

- 薩摩藩第11代当主・島津斉彬

江戸育ちの斉彬の正室・英姫は、将軍・家斉の弟で一橋家当主・斉敦の娘である。

斉彬は、おゆら騒動後、1851（嘉永4）年、11代藩主となる。

- おゆら騒動

おゆら騒動は、斉興の後継者争いである。斉興の正室・弥姫の嫡子・斉彬と、側室・お由羅の庶子・久光の異母兄弟両派の対立抗争である。

問題は斉興が、久光を後継者にしようとした事で、斉彬が藩の財政を食いつぶす事心配した調所も当然、久光派であった。

結論的には、斉興により斉彬派の家臣（および家族まで）に、嘉永2～3年にかけて、切腹や遠島など、極めて過酷な厳罰が下された（約50名）。

然し、御三家・水戸藩主・徳川斉昭、福井藩主・松平慶永（橋本佐内らを登用）、老中・阿部正弘らの仲介で、1851（嘉永4）年、斉興の引退・隠居および斉彬の第11代藩主就任が決定した。

斉興は、引退後、玉里別邸で暮らしたが、1858（安政5）年の斉彬の死後まで生き、安政6年に死亡した。

ここで重要な事は、斉興、斉彬親子の仲が非常に悪かった事である。

この事は、斉彬亡き後の西郷に、暗い陰を落とす事になる。

- 水戸藩主・徳川斉昭

おゆら騒動で斉彬に加担した水戸藩主・徳川斉昭は、もと松平紀教としのりと言ひ、将軍・家斉より一字を賜り、藩主となった。

藩校・弘道館を設立、藤田東湖らを登用した。水戸学の立場から攘夷思想を持ち、幕府の開国論には、強行に反対した。

- 15代将軍・徳川慶喜

慶喜は、水戸藩主・斉昭の実子である。将軍家慶の意向で、松平昭致は、老中・阿部正弘を介し、一橋家を相続した。家慶よ

り一字を賜り徳川慶喜と名乗る。

- 老中・阿部正弘

阿部正弘は、福山藩当主。

将軍・家慶、家定の2代に亘り、幕政の中心にいた。

ペリー再来の1854（嘉永7）年、日米和親条約を締結、鎖国政策は終わった。

その後、攘夷派の徳川斉昭と対立。攘夷派、開国派の板ばさみになり、1855（安政2）年、開国派の堀田正睦に老中首座を譲る。

- 斉彬の養女・篤姫

篤姫（<sup>いち</sup>一，篤子，敬子，後に天章院）は、近衛忠熙の養女となり、1856（安政3）年、第13代将軍・家定の御台所となる。

篤姫の輿入れに際しては、西郷が活躍した（図204、205）。

以上の対人関係から、薩摩藩（斉彬）と将軍家、水戸藩、一橋家、近衛家の関係が深い事が窺える。

（つづく）



【図204】鶴丸城趾内の天璋院篤姫坐像



【図205】鶴丸城趾から背後に連なる城山